

節分から立春へ

寺の住職か神社の神主さんか、はてどちらの仕事の方が大変か？と問われれば、どう考えてみても神主さんであろう。近所に江戸時代初期から脈々続く神主の家に生まれた同級生がいる。或る日、ウォーキングで二人並んで歩いていると、すれ違った女性から、「あら、お二人さん並んで最強なこと…」とからかわれたりする。どちらも体力勝負の面があって体を鍛えないといけないのだが、とにかく神様たちは自由奔放わがままなので（小声で言う）大変であろう。当寺のお稲荷様も同じだ。彼は代々ご先祖様によって培ったパワーと直観力がある気がする。だからひょうひょうとして仕事をしている。まじめな神主さんは、午前1時には起床沐浴し身を清め、お供え物を捧げなくてはならない。そして2時（丑三つ時）には御祈祷を始めなくてはならない。寝坊をすれば容赦なく布団ごと投げ飛ばされて部屋の壁に叩きつけられることになる。佛はそんなことはなさない。



2月3日は節分で翌日4日は立春。神佛の世界では大晦日と正月。京都で節分に蕎麦屋へ行くと店先に『年越し蕎麦』の張り紙がしてある。立春の午前0時を過ぎた頃から、社殿の方から聞こえる話声で起こされる。大勢の話し声がワイワイがやがやとしてもう寝ていられない。社

殿では萬（よろず）の神たちが社殿に降りてきて話し合いをしているという。氏子帳を開き、今日から始まる新しい年の一年分の各氏子の「厄」の内容と量を話し合いで決めているという。例えば、「俊徳丸は昨年も相変わらずいい加減な事ばかり友引通信に書いておる。こりんやつだ！また倍にしてやれ！」ということで、私の「厄」が帖面に記載される。このように決められた「厄」はありがたくいただき、一つ一つ解決していかなければならない。本当は、「厄払い」なんてしてはいけないのだそうだ。

「厄」といえば、大きな事故に遭い死に繋がるような出来事を連想しがちなのだが、そうではなくて、日常細々とやらなければならないことで、何となく苦手で億劫で、いつも手をつけるのが後回しになってしまうことなどは、すべて与えられた「厄」だ。私にとってこの原稿を毎月書くことも「厄」です。毎年提出しなければならない確定申告。3月15日締め切りと分かっているのに税務署へ行くのを後回しにしてイライラしてストレスだけが溜まります。これも立派な「厄」です。一念発起して！そういった苦手なことほど真っ先に手をつけ、その仕事を片付け成し遂げたとしましょう。そこには普段味わえない達成感、清々しさを感じることでしょ。それが生きる勢い「運勢」です。神から立春に与えられた「厄」により「運勢」をつくり、持って生まれた「運命」の玉に根気よく塗り重ねて負の運命を自ら変えて行きましょう。ちなみに、個々に持って生まれた「運命」だけは神佛にどれだけお頼みしても変えることはできませんから。 俊徳丸